

Title	商品の二要因の対立について：反省規定の論理学
Sub Title	Antagonisms between two factors of s commodity : logic of determinations of reflection
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.4 (1949. 4) ,p.213(1)- 233(21)
JaLC DOI	10.14991/001.19490401-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

藤原 守胤 著

B 6判 二六二頁 定價 一七〇圓

アメリカ革命史論

—アメリカ憲法の背景と原理—

植民地十三州のアメリカ人が、いかにして英本國の支配を脱れて獨立を勝ちえたか、アメリカ民主主義の理想が國民の生活様式として世界史上はじめて恒久的な憲法制度に結晶したかを描いた。民主主義國家への更生期にある日本にとり有意義なる資料である。

藤林 敬三 閱

B 6判 二二三頁 定價 一三〇圓

井原 紘 著

労働組合保障

—クロード・ショップの問題—

労働協約の骨子をなすショップ制の問題を我國において最も早く手を着けた井原教授の研究に戦後の日米兩労働運動の概況、我國組合の實例を加筆の上、藤林教授の懇切なる校閲・補正を得て労働組合保障の参考たるべく完璧を期した。

慶應出版社

三田學會雜誌

第四十二卷 第四號 昭和二十四年四月

商品の二要因の對立について

—反省規定の論理學—

遊部久藏

小引

本稿は前稿「價值表現の兩極について」本誌、四二卷一〇號と相俟つて我々の今後における價值形態論の本格的研究のための端初的オポエ書きをなすものである。

價值形態論——「資本論」第一卷第一篇第一章第三節——は極めて困難な部分の一つであろう。と同時にそれは最も重要な部分の一つでもある。(ひとり貨幣發生の必然性を理解する鍵がそこにあるというだけでなしに……)が本稿及び前稿にあつかつた範圍内においての樞要點はたゞ一つである。それは劈頭の簡單な商品の價值規定をあくまで資本のロゴスとみる我々の立場から、第三節における價值形態の發展をも嚴密な意味では資本のロゴスとみようとすにある。二つの稿はかゝる我々の解釋のための根本的前提をあたるものである。今後我々の独自の見解はこの基礎的論點

商品の二要因の對立について

一 (二一三)

の上に展開されるであろう。

従來の諸見解はすべて（すべて、である！）かの價值形態の展開の論理に歴史的商品形態の發展を即應（即應である！）させている。資本制商品説をとる河上博士すら第三節からはじめて論理が歴史的發展に適應すると云われて、かかる立場に立たれている。（『資本論入門』、第一分冊、一一八—一九頁。第二分冊、三—一三、一五、四九—五〇頁。）もちろん我々もまた價值形態の發展における論理的なものと歴史的なものとの一致をみとめるものである。但しその場合、この一致を簡單、安直に解したくないのであつて、もとより論理としての簡單な價值形態が歴史上未發展の商品形態に——その論理の單純、抽象性の一面において——適應しうるであろうことはこれをみとめる。たゞ問題はこの適應の立入つた内容なのであり、事情なのであり、そこに我々はある種の屈折と、したがつて制限とをみとめざるをえない。これあたかも價值法則の生産價格に對する歴史的先行性に關する我々の理解の仕方に擬えることができよう。往看。

本稿は前稿のいわば準備的段階をなすものであつて（發表の順序の逆となつた事情については後記）、價值表現の兩極の意味をたゞしくとらえるために先ず商品の二要因の對立の意味を嚴密に理解すべく努力が試みられた。蓋し簡單な價值形態は——前稿で述べた如く——商品の二要因の内的對立の外化したものに外ならぬからである。なお我々はこゝでヘーゲルにあまりにたよりすぎたことについて一言なきをえない。すでにしてエンゲルスの指摘をまつまでもなく（『カール・マルクス『經濟學批判』第一冊、M・E全集、第七卷の三、三七頁以下、「ルドイッヒ・フオイエルバッハと獨逸古典哲學の終末」、同全集、第二卷、九〇五頁以下。「コンラット・シュミット宛一八九二年一月一日附、の手紙」、同全集、第二卷、四二二頁。其他。）、ヘーゲル辯證法はマルクスによつて批判的に克服されたのである。けれどもマルクス自身、「資本論」の「論理學」というものを書きのことしていないので、我々はヘーゲル論理學の「資本論」理解への適用に際して大きな困難に逢着せざるをえない。この點、我々の試みに對して我々自身いさゝか危懼を有するのであるが、したがつて自己檢討をかさねたいと思つているが、なお忌憚なき批判を期している。

なお本稿執筆の直接的動機について云えば、前著「價值と價格」（特に七五—六頁。及び八六頁、註一〇）において商品の二要因の單なる分離と區別さるべきその對立、しかも絶對的のギリギリの對立ということを簡單な商品の價值規定に關して強調したが、この點を更に布衍するために本稿が書かれたといつてよい。本稿はもと「價值論争史」に収録する豫定のところ（前稿、註一〇）、内容に適わぬため割愛して、に發表するところとなつたのである。前稿に先立つべき本稿の發表のおくれた事情はこれによる。

第一節 區別の二契機

我々はかつて簡單な商品と云われるものの抽象性について論じた。（註二）要するにそれは資本制生産諸關係から抽象されているとともにまたひとり二要因（使用價值と價值）乃至二重の労働（具體的、有用的労働と抽象的、人間的労働）の統一物たるにすぎぬ商品である。換言すればそれは一面價值乃至抽象的、人間的労働としての商品、他面使用價值乃至具體的、有用的労働としての商品である。

いま價值乃至抽象的、人間的労働としての商品ととりあげてみる。それはかゝるものとして自己との同一性（*Identität mit sich*）にあると云える。蓋し價值乃至抽・勞（抽象的、人間的労働の略稱）としての商品は本質としての商品であるから、自己のうちで反照を行う。自己との同一性とは價值乃至抽・勞としての商品の反省的自己關係であ

る。——なおこゝで一言すれば使用價值乃至具・勞（具體的・有用的労働の略稱）としての商品もまた本質としての商品である。それは生産過程によつて根據づけられておりしかも交換價值の質料的擔い手として後者を根據づけている。使用價值は決して物として直接にあるものではない。それは一箇の具・勞の實存形態をなしている。

だがこの自己との同一性ということも單にそれにとゞまることを許されない。しかるに外的反省（*äussere Reflexion*）の立場はこゝにとゞまる。で、かくして得られるものは抽象的同一性である。この立場においても區別というものがある。しかしそれは同一性の外部に且つこれとならんで區別をもつ。したがつて區別からひきはなされた同一性の立場にたつのである。本當の意味での同一性とは區別を含んだものである。價值乃至具・勞としての商品の自己同一性はその意味でその他者たる使用價值乃至具・勞としての商品からひきはなされた或いは後者を外部にもつものではなくしてこれをうちに含んだ自己同一性である。「本質は、それが自己に關係する否定性、したがつて自己から自己を反撥するものである時のみ、純粹な同一性であり自己自らのうちにおける反照である。したがつて本質的に區別（*Unterschied*）の規定を含んでゐる。」（註二）

かくして我々は同一性から區別へとすゝんだ。「大論理學」の敘述を辿ると、この區別は次の如く展開する。(一)絕對的區別（*absolute Unterschied*）、(二)差別（*Verschiedenheit*）、(三)對立（*Gegensatz, Entgegensetzung*）、(四)矛盾（*Widerspruch*）、これである。

價值論の理解上——本稿の意圖する範圍内で——とくに重要なのは(二)と(三)との識別である。しかし(一)より(四)にいたる區別の根本特徴はすでに(一)の中に見出される。即ち區別の二契機としての區別と同一性とが、これである。

さて當面の問題についてみれば、同じ商品のうちにあるものとしての使用價值乃至具・勞と價值乃至具・勞とが右の如き區別における二契機を有するということである。即ち使用價值と價值との區別なることはこゝに述べるまでもなからう。前者は商品における感性的なるもの、物的諸屬性（質的規定）であり後者は超感性的なるもの、幻的對象性（量的規定）をあらわす。また具・勞と抽・勞とが區別の關係にあることは生産過程における二契機としての労働過程と價值形成の増殖過程との相異なる性格、とくにそこで作用する労働の質的差異を想起すれば足りる。けれどもこの使用價值と價值、具・勞と抽・勞はそれぞれまた同一性をも有する。即ち使用價值と價值とは商品の二要因として、具・勞と抽・勞とは商品にふくめられた労働の二重性としてそれぞれ統一物を形成している點において同一性をもつ。

「人は云う、二つの物は……の點で互に區別されてゐると。——……の點で」とは唯一同一の見地に於て、同一の規定根據に於てという意味である。故にこの區別は反省の區別であつて、定有の他在ではない。」（註三）そのような反省の區別の立場においては、單なる區別は區別ではない。むしろ區別は同一性に關係してはじめて區別たりうるのである。かくして同一性も區別もそれぞれ全體であるとともにまたその契機をなしている。區別はその他者即ち同一性を自分のうちに有し、一方同一性は區別の規定へ入りこみその契機となることによつて自己を維持する。このような區別の二契機の相互關係。「——而してこの事實は反省の本質的な性質として、凡ての活動性及び自己運動の規定的な根源と見做さるべき事柄である。」（*Diesz ist als die wesentliche Natur der Reflexion und als bestimmter Urgrund aller Thätigkeit und Selbstbewegung zu betrachten.*）（註四）このことを銘記せよ。

蓋しこの區別の二契機こそたゞちに差別の二契機たるものであり、且つ差別より對立への發展の基礎となるものであるから。この點は後見する如くであるが、商品の二要因としての使用價值と價值とを、又労働の二重性としての具

勞と抽・勞とを單に區別の面においてみるのは區別の一面をしかとらえていないこととなる。かゝる認識は區別としての區別に墮す。區別がふくむもう一つの面、同一性の面、商品の二要因としての、又勞働の二重性としての同一性の面をも區別の中へひきいれかの區別の自己反省、區別の契機とすることによつて、區別はその本來的な姿において措定されるであろう。かくして又、我々ははじめて、對立物としての使用價值と價值とが、具・勞と抽・勞とが、商品の「凡ての活動性及び自己運動の規定的な根源」たることの認識をたゞしくもつことができるであろう。

我々は價值乃至抽・勞としての商品の自己同一性 \parallel 反省から出發した。(あるいは使用價值乃至具・勞としての商品の自己同一性から出發してもよい。)そしてかゝる自己同一性が區別をふくむこと、そして區別の二契機としての同一性と區別とをみとめた。このような基礎知識をもとにして我々は差別及び差別より對立の段階へとすゝむ。

第二節 差別

A 差別

いま我々は即自且向自的な區別、本質の區別としての絶對的區別に關して區別の二契機について語つたところである。この二契機は區別における被措定有であり規定性であるが、しかもその各々がこの被措定有の中にありながら自己自身への關係、自己反省(契機としての一面化)の状態にあるとき、區別は差別と呼ばれる。

差別の特徴については、「小論理學」の中で簡單に次の如く記されている。

「區別は、第一に、直接的な區別、すなわち差別である。差別のうちにあるとき、區別されたものは各々それ自身であつて、他のものへの關係に無關心である。したがつてその關係は各々に對して外的な關係である。差別のうちにあるものは區別に對して無關心であるから、區別は差別されたもの以外の第三者、比較をするものうちにおかれることになる。」(註五)そして差別の段階においては、關係させられるもの同一性は相等性(Gleichheit)、その不同性は不平等(Ungleichheit)と呼ばれる。こゝに實は相等性と不平等との本來の面目がある。

「大論理學」においては更に差別の内容について詳論されているが、こゝでは要記するにとどめる。即ちまさに區別と同一性とに關してそれらとともに區別乃至同一性の契機として互に参照し合うということを述べたが、差別の段階においては兩者は参照し合わないものである。いなむしろこうした外的區別のうちにあることこそ相等性及び不平等性の相等性及び不平等性たる所以である。即ち差別の段階においては相等性と不平等とは區別乃至同一性の規定の中でありながら單に自己に關係するものとして、自己關係としてあるにすぎない。かくして相等性は不平等性に對して關係せず、また不平等性は相等性に對して關係せず、二契機の各々は互に規定し合うことがない。「このように兩者(同一性と區別——引用者)はそれ自身に於て區別されているものではないため、従つて區別は兩者にとつて外面的である。故に互に差別する存在は同一性及び區別として相互に交渉しあうのでなく、寧ろ相互に無關心的で且つ夫々の規定性に無頓着であるところの差別的なもの一般として關係しあうにすぎない。」(註六)こゝで「互に差別する存在」(die Verschiedenen)と記されているものを使用價值と價值、あるいは具・勞と抽・勞と讀め。即ち使用

價值と價值、あるいは具・勞と抽・勞とは差別の段階においては、それらの區別の契機たる相等性と不平等性が互に参照し合う状態にないため、それらのものは同一性及び區別として相互に交渉し合うことなく、むしろ相互に無關心的であつてそれぞれの規定性に無頓着なるものとして相互に關係し合うにとどまる。かゝる事態は資本制商品に先行する歴史的單純商品——エンゲルスの指摘する如く資本制社會成立以前五六千年もの間存してきたところの——に關

してみられるところである。先ず我々は原始的交換形態たる直接的生産物交換についてマルクスの述べるところをみるとしよう。

曰く「直接的な生産物交換は、一面では簡単な価値表現の形態をもち、他面ではまだこれをもたない。かの形態は $\text{商品A} = \text{商品B}$ であつた。直接的な生産物交換の形態は $\text{商品A} = \text{商品B}$ である。AおよびBなる物は、こゝでは交換以前には商品ではなくて、交換によつて初めて商品となる。ある使用対象が可能性から云つて交換価値である第一様式は、非使用価値としての、その所有者の直接的欲望を超過する分量の使用価値としての、その使用対象の定在である。諸物は、絶對的に人間にとり外的なものであり、従つてまた譲渡されうるものである。この譲渡が相互的であるためには、人々はたゞ、黙つてかの譲渡されうる諸物の私的所有者として、また正さにそれゆゑに相互に獨立せる人格として、對應し合いさえすればよい。しかし、かゝる相互に他人たる關係は、自然發生的な共同體の諸成員にとつては——その共同體が家父長制家族の形態を有しようと、古代インド的共同體の形態を有しようと、インカ國・等々の形態を有しようと——實存しない。商品交換は、諸共同體の終るところで、諸共同體が外の諸共同體・あるいは外の諸共同體の諸成員・と接觸する點で、始まる。ところが、諸物がひとたび對外的共同生活において商品となるや否や、それらは反動的に、内部的共同生活においても商品となる。それらの物の量的な交換關係は、最初には全く偶然的である。それらの物が交換せらるるものであるのは、それらを相互に譲渡しあおうとする、それらの物の所有者たちの意志行爲によつてである。かれこれするうちに、他人の諸使用対象に對する欲望が次第に確立される。交換の絶えざる反復は、それを一の規則正しい社會的過程たらしめる。だから、時の経過につれて、諸労働生産物の少くとも一部分は、意圖的に交換の目的で生産されざるをえない。この瞬間から、一方では、直接的要求に對

する諸物の有用性と、交換のための諸物の有用性ととの間の、分離が確立する。諸物の使用価値は、それらの物の交換価値から分離する。他方では、それらの物が交換される量的關係は、それらの生産そのものに依存するようになる。慣習は、それらの物を、価値の大小として固定させる。」(註七)

直接的生産物交換において我々のみとめるものは商品の二要因の對立ではなくして單なる分離ではない。更に貨幣の導入による發達せる商品交換においてもそれが單純商品の交換であるかぎりにおいては我々は本來の意味における對立をみとめることができないであらう。(詳しくは私の諸著参照。)

我々はなお差別の論理を進めよう。差別の段階においては相等性は外面的な同一性、不平等性は外面的な區別としてある。したがつて相等性は同一性ではあるにしても被指定有としての同一性、即自且向自的ではないところの同一性であり、一方不平等性は區別ではあるにしても即自且向自的に不等的存在それ自身の區別をなすものではない。このような差別の段階においては「或者が他の或者に同等又は不等であるという關係は、この或者のいずれにも係わりのない事柄である。兩者は各々たい自己にのみ關係して、即自且向自的にそれ本來のまいである。而して相等性及び不平等性としての同一性又は非同一性は、寧ろこの二つの或者の外に在るところの第三者の顧慮(die Rücksicht eines Dritten)に他ならない。」(註八)

外的反省は差別の状態にある或者と他の或者とを相等性と不平等性とに關係させる。この關係は比較(Das Vergleich-heit)と呼ばれる。比較は相等性から不平等性へと、また不平等性から相等性へと來往する。がこの相等性と不平等性と來往的關係はこれらの規定自身にとつては外面的であるにすぎず、また兩規定は相互關係的ともならず互に導るものとは向自的に或る第三者に關係している。かくして外的反省においては相等性と不平等性とは相互に無關係なものとし

て現われる。外的反省の立場は相等性と不等性を「……の限りに於いて」とか、「方面」とか「顧慮」とかによつて互に差別する二つの存在に關係させ、かくしてこの兩者を分離する。かくして差別の状態にあるとき或者と他者とは一面からみれば互に相等であるし、他面からみれば互に不等であると云われる。また二つの存在は相等であるかぎりにおいてそれらは不等ではない、即ち相等性はたゞ自己にのみ關係し、同様に不等性は單に不等性であるにとゞまらる。

されば差別においては、外的反省が比較によつて差別するものの相等性と不等性とを規定するにかゝらず、この比較そのものは存在そのものに内在的なものでないと云いうるし(註九)、また相等性と不等性との尺度となるべきものが第三者である點、差別する二つのものの區別は内面的區別たることを失つて單に外面的なものとなることも云える。(註一〇)

相等性と不等性とは前述の如く元來區別の兩契機である。したがつてこの兩者はそれぞれその他者との區別を基礎にしてはじめてそれ自身となりうるにもかゝらず、差別の段階においては兩者の無關心性のために兩者の各々は自己同一たるにとゞまつており、こゝでは區別は解消している。これが差別の根本特徴であるが、こゝにすでに差別の止揚||對立への移行の内因が見出せるのである。ヘーゲルの述べるところをきこう。

曰く「併しながら兩者(相等性と不等性——引用者)は斯かる分離(外的反省に基く分離——引用者)に由つては唯だ自己を止揚するだけである。矛盾と解消を兩者から遠去けるべき筈のもの、即ち或者は或る顧慮に於ては他者と相等であるが、併し他の顧慮に於ては不等であるという關係——この相等性と不等性との隔離が寧ろその破壊者なのである。何となれば相等性と不等性との兩者は區別を構成する二規定であるからである。換言すれば兩者は、一方ははそのために共に相等性であるにすぎない。」(註一一)

B 差別から對立への發展

我々はさきに差別の根本特徴たるものが同時に差別から對立への進展の内因を含むと述べた。即ち差別においては相等性と不等性とが互に反照し合わないでいる。しかるにこの兩者は元來(絶對的)區別の兩契機たるものであるから、反照し合うべきものである。かくし兩者はその本性に基くところのその否定的統一において反照し合い對立となる。そしてこのような差別から對立への進展は——ヘーゲルによれば——普通の意識のうちに見出されるという。というのは、相等性を見出すということは區別の現存を前提してのみ意味を持ち、逆に、區別するということは相等性の現存を前提してのみ意味を持つ、ということをわれわれは認めているからである。區別を指摘するという課題が與えられている場合、その區別が一見して明かなような對象(例えばペンと駱駝のように)しか區別しえないような人に、われわれは大した慧眼を認めないし、他方、よく似ているもの(例えば「ぶな」と「かし」、寺院と教會)にしか相等性を見出しえないような人を、われわれは相等性を見出す勝れた能力をもつていない人とは言わない。つまりわれわれは區別の際には同一性を、同一性の際には區別を要求するものである。」(註一二)このような區別こそ對立と

呼ばれるものである。

だが對立は決して差別の單なる絶對的區別への復歸ではない。それは「規定的區別」(bestimmte Unterschied) (註一三)、「規定的差別」(Bestimmte Verschiedenheit) (註一四)である。

「斯くて相等性及び不等性そのもの、即ち被指定有は無關心性又は即自有的反省を通じて自己自身との否定的な統一へ、換言すればそれ自身相等性と不等性との區別であるような反省へと還歸する。而して自己の互に無關心的な側面を同時に全く唯一の否定的統一の契機にすぎないものとしていたるところの差別は對立である。」(註一五)もう一度云えば、對立とは區別の兩契機たる相等性と不等性とがそれぞれその他者を媒介として自己に反省している場合を、換言すれば比較の第三者を介さず各々がその他者を自己の他者とする場合、あるいは二つのものが相互的に自己を區別している場合を指す。(註一六)

さて我々は相等性と不等性との兩者が關係させられている「唯一同一のもの」(das eine und dasselbe)としての商品に眼を轉じると、これに含められた互に差別する二つの存在たる使用價值と價值、乃至具・勞と抽・勞は、差別の段階においては、一面からみれば互に相等であるし他面からみれば互に不等であるという外的反省、第三者の顧慮の立場にたつ。だからこゝにおける使用價值と價值、乃至具・勞と抽・勞の相等性なるものは、前述の拙劣なる相等性の比較の事例としての「ぶな」と「かし」、あるいは寺院と教會の相等性と多かれ少かれ似通つた程度のものにとゞまり、また使用價值と價值、乃至具・勞と抽・勞の不等性なるものも、前述の拙劣なる不等性の比較の事例としてのペンと駱駝の不等性と多かれ少かれ似通つた程度のものにとゞまつていと云わねばならない。しかるに對立においては全く相等性と不等性との面貌が異なることとなる。

第三節 對立

「差別がより明瞭に、より鋭細に考えられるにしたがつて、その兩方面、相等性と不等性ともそれだけ明瞭に鋭細に現われ相互に對立する。發展せる差別は對立である。」(註一七)

對立の契機は積極者(das Positive)と消極者(das Negative)とである。積極者とは不等性に對する關係をそれ自身の中に包含するところの自己反省した自己相等性である。一方、消極者とは自己の非有即ち相等性に對する關係をそれ自身の中に包含するところの不等性である。「兩者の各々は、それが他者でない程度に應じて獨立的なものであるから、各々は他者のうちに反照し、他者があるかぎりにおいてのみ存在する。したがつて本質の區別は對立であり、區別されたものは自己に對して他者一般をではなく、自己に固有の他者を持つている。言い換えれば、一方は他方との關係のうちのみ自己の規定を持ち、他方へ反省しているかぎりにおいてのみ自己へ反省しているのであつて、他方もまたそうである。つまり、各々は他者に固有の他者である。」(註一八)

積極者は同一性にちがいないが、しかもそれは無規定な同一性ではなく、より高い眞理における同一性である。蓋しそれは自己自身への同一關係であるとともに他者に對するものとして規定されているからである。消極者はそれ自身としては區別そのものにほかならない。がそれは同一性でないという規定のうちにおける區別そのものである。即ち消極者は「自己自身のうちにおける區別の區別」であると述べられる。

かくして積極者と消極者とを契機とする對立の三つの面がみとめられる。一、積極者と消極者との各々はその他者があるかぎりにおいてある。二、その各々はその他者がないかぎりにおいてある。三、その各々はそれ自身において

積極者であるとともにまた消極者、消極者であるとともにまた積極者でもある。

曰く「……積極者と消極者とを構成するところの規定は、この積極者と消極者とが第一に對立の絶對的契機であるということに於て成立する。兩者の存立は離れることの出来ない唯一的な反省である。それは唯一的な媒介であつて、この媒介の中に於て各々は自己の他者の非有を通じて、從つて自己の他者換言すれば自己の非有を通じて存在する。——斯く兩者は對立せしめられたもの一般である。言い換えればその各々は單に他者に對して對立せしめられたものにすぎないのであつて、一方が積極的で他方が消極的であるのではなく、寧ろ兩者は相互に否定的〔消極的〕である。故に一般に各自は第一に、他者がある限りに於て有る。各々は他者を通じて、即ち自己の非有を通じて始めてそれ自身であることを得る。即ち各々は單に被指定有であるにすぎない。ところが第二にそれは他者が無い限りに於て有る。それは他者の非有を通ずることに依つてそれ自らであり得る。即ちそれは自己への反省である。ところがこの二つの事實は對立一般の持つ唯一的な媒介なのであつて、積極者と消極者はこの媒介の中に於ては一般に單に被指定有であるにとゞまる。」(註一九)

「……積極者と消極者は第三に、一つの被指定者にすぎないものではなく、又無關心的存在にすぎないものでもない。むしろ却つてその被指定有、即ち一つの統一内の——兩者を自己自身はこの統一ではないが——他者への關係は兩者各自の中へ取り戻されているのである。即ち各自はそれ自ら積極的であると共に消極的でもある。積極者と消極者とは即ち自向的な反省規定である。從つてその各々は對立せしめられたものの斯かる自己反省の中で始めて積極的及び消極的となる。積極者は他者への關係——この中に積極者という規定性が存在するのであるが——をそれ自身に於て所有する。同様に消極者も或る他者に對するものとしての消極者であるのではなく、寧ろ積極者と同様に、そ

れを消極者たらしめるところの規定性を自己自身に於て所有する。」(註二〇) ひととは積極者と消極者とを絶對の區別と考へがちである。しかし兩者は本來同じものであり、したがつて我々は積極者を消極者と呼ぶこともできるし、逆に消極者を積極者と呼ぶこともできる。例えば財産と負債とは特別の獨立に存在する二種の財産ではない。蓋し一方のひとたる債務者にとつての消極者は、他方のひとたる債權者にとつては積極者である。また方向という例をとつてみても、東への道程は同時に西への道程でもある。

したがつて積極者と消極者とは本質的に制約し合つていゝものであり、相互關係においてのみ存在するものである。いまかりに磁石を切斷してみても、一方には北極、他方には南極があるなどというようなことは云いえないであろう。何故なら磁石の北極は南極なしには存在しえず、南極もまた北極なしには存在しえないからである。同様に電氣においても、陽電氣と陰電氣とは獨立に存立する別々の流動體ではない。

「一般に對立において、區別されたものは自己に對して單に或る他者を持つのでなく、自己に固有の他者を持つのである。」(註二一) 私は人間であり、私の周囲には空氣、水、動物、及び他者一般があると云う場合、常識はこゝに區別するんでは對立を考へるであらう。だがこゝではすべてが相互に無關係であるにとゞまつている。「哲學の目的は、これに反して、このような無關係を排して諸事物の必然性を認識することであり、他者をそれに固有の他者に對立するものと見ることにある。」このような本來の對立の事例として我々は更に無機的自然と有機的自然とを、あるいは自然と精神とをあげるのであらう。我々は無機的自然を有機的自然とは別なものとするべきではなく、有機的自然に必然な他者とみななければならぬ。兩者は本質的な相互關係のうちであり、各々はそれがその他者を自分から排除し、しかもまさにそのことによつて他方に關係するかぎりにおいてのみ、存在するのである。同様に自然もまた精

神なしには存在せず、精神は自然なしには存在しない。「物を考える場合、『なお別なことも可能だ』と言うのをやめることは、一般に重要な一歩前進である。こういう言い方をする場合、われわれはまだ偶然的なものから脱していないのであつて、これに反して、先に述べたように、本當の思惟は必然的なものの思惟である。——現代の自然科学は、先ず磁氣において極 (Polarität) として知られた對立を、全自然を貫いているもの、普遍的な自然法則と認めるに至つてゐるが、これは學問上本質的な進歩である。たゞこの場合大切なことは、切角それまで進みながら又しても無雜作に單なる差別を對立と同等なもの認めないことである。しかし人々はよくそうしたことを行つてゐる。」(註二二) ヘーゲルがあげたいくつかの對立の事例、財産と負債、東と西、北極と南極、陽電氣と陰電氣、有機物と無機物、自然と精神、などに我々は我々の當面の課題である使用價值と價值とを加えるべきである。まゝに、ペンと駱駝、又は「かし」と「ぶな」、などの事例にみられる區別實は差別と使用價值と價值との區別實は對立とを同一視してはならぬと述べた。まことにその通りであつて、使用價值と價值との對立は、「なお別なことも可能だ」というような發想を絶對に許さぬものである。使用價值と價值との區別は本質的區別であり、その各々は自己に對して他者一般に屬すものとしてではなく自己に固有の他者としての他者をもつてゐる。この自己に固有の他者なるものはまた自己に必然の他者でもある。要するに使用價值は價值なしには存在せず、價值は使用價值なしには存在しないと同時に、使用價值は價值があつては存在せず、價值は使用價值があつては存在しないのであるから、使用價值と價值とは區別即同一、同一即區別という絶對絶命のギリギリの對立においてあるのである。冒頭の商品分析の讀者はすべからずかくの如き對立の尖端において兩者の對立を把握せよ。蓋しこゝに到つてはじめて矛盾——自己運動の生ずる前提があたえられるであろうから。レーニン曰く「思惟する理性 (智能) は鈍くなつた差別的なものの差別を、表象の單なる多様性を、本質的な差別にまで、對立にまで尖鋭化する。多様性は矛盾の絶頂に登りつめてからはじめて相互に對して可動的となり、生動的となる、——そして自己運動と生動性との内的脈動たる否定性を獲るのである。」(註二三)

しからは使用價值と價值とをしてこのような意味での眞の對立にみちびく根據となるものは何か？ それは商品が一般に資本制的に生産されることである。これによつてはじめて商品の生産過程が労働過程と價值形成の増殖過程との二契機に對立化され、ひいては商品にふくめられる労働の二者鬭争性——具體的・有用的労働と抽象的・人間的労働との對立化がみられる。だから使用價值と價值との對立の直接の根據は商品にふくめられている労働の二重性の確立にある。(註二四) してこゝに我々が肝に銘すべきことはかゝる二條の對立物が決して平行的に存在するものではなくして一方の他方への從屬、還元というかたちをとることであり、その上で運動も生ずることである。即ち資本制社會においては労働過程が價值増殖過程に從屬され還元される。これを根底として具體的・有用的労働の抽象的・一般的労働化、ひいては使用價值の價值化ということが徹底的に遂行される。かゝる事實を基礎として商品(これは労働力を含む)の交換をはじめとしてこの社會における經濟的全運動過程が生じ來るのである。

「資本の直接的生産過程は、資本の労働過程および價值増殖過程であり、商品生産物を結果とし剩餘價值の生産を規定的動機とする過程である。」(註二五)

「資本制生産方法を最初から際立たせる二つの特徴がある。

その一——資本制生産方法は、生産物を商品として生産する。商品を生産するということは、この生産方法を他の生産諸方法から區別するものではない。けれども、商品たるものが生産物の支配的な決定的な性質だということは、確かに資本制生産方法の區別的特徴である。……

その二——資本制生産方法を特に際立たせるもう一つの特徴は、剰餘価値の生産が生産の直接目的とされ決定動機とされているということである。」(註二六)

ヘーゲルもまたその「法律哲學」においてブルジョア社會においては、新しい使用価値の創造ということが、それによつて利潤を獲得するものによつてなされることを洞察していた。曰く「イギリス人がコンフォータブル(快適)と稱する所のものは、全く汲み盡し得ない無限に進行して行くものである。好都合な状態も次々に不都合となり、そしてこの発見は終る所がないからである。だからして新しい欲望は、それを直接的に有つてゐる者からではなく、むしろその發生によつて利得を求める者によつて引き起される。」(註二七)彼はまたこの社會においては社會的使用価値ということが使用価値の普遍的な實際の定有形態であることをも看抜いていたのである。(註二八)云うまでもなく、使用価値は社會的使用価値としてはもはや單なる交換価値の質料的擔い手——物質的基礎としてしか意味を有しないことを想起せよ。(我々はかくしてマルクスの商品分析論の立場よりヘーゲルの抽象的論理學における對立論に關して反省を試みる手懸りを得たのであるが、もつともこのことは有論と本質論との綜合的再考察によつてもある程度同じような結論に到達しうるのではないかと思われる。これらの諸點は今後矛盾論の考察に際して明らかにされるであらう。)

「資本論」劈頭の商品分析は右の如き對立統一關係に立つ商品の二要因及び労働の二重性の検出を課題とする。それはなるほど分析によつてはじめて検出されこそすれ、もとより分析を俟つものとしてすでに客觀的にあるものである。マルクス自身労働の二重性の節の書出しにおいて「商品に含まれてゐる労働のかゝる二者鬭争的な本性は、私により初めて批判的に證明されたものである。」(註二九)と述べてゐる所以である。マルクスはそれを證明した(Marx beweisen)のであつて發明したり案出したのではない。マルクスの分析は對象に固有の論理にしたがつたのであつて、ヘーゲル流に云えば有の自己内運動としての反省を追思惟したまでである。この點かつて我々の論じたところであるが(註三〇)、ともかくこれを見失えば多かれ少かれ、使用価値の捨象を蒸溜法と見做したり、商品交換における第三の共通物の存在をドグマ乃至「先驗的構成」と見做すにいたるであらう。この點の認識は肝要である。と同時に劈頭で分析されている商品のロソスとしても資本制的性格もまたこゝであらためて確認されねばならぬ。

我々は更にすゝんで商品における二要因、及び労働の二重性のもつ矛盾的關係についてみなければならぬ。この二つの對立二矛盾關係こそ、「資本主義社會の經濟的運動法則」の倚つて立つ基點であり、いわば「資本論」のその後全展開過程の樞軸たるものであることは、我々のすでに述べたところである。(註三一)しかしその場合においても二要因、二重性の對立の論理的意味、とくに矛盾の論理的意味について立入つて述べなかつたから、こゝでこの點を明らかにする必要がある。

對立の規定は普通の意識においては「排中律」(der Satz des ausgeschlossenen Dritten)という命題であらわされる。それによれば、Aは+Aか-Aでなければならぬという。かくしてすべてのものは對立せる存在であり、積極的又は消極的に規定されていて、第三者がしめ出される。しかしこの命題は矛盾を避けようとして却てそうすることによつて矛盾をおかす「有限な悟性の命題」である。蓋しこの命題は第三者を排除しようとしつゝ事實上對立に無關心であるような第三者をその中に存在させてゐる。即ち+でも-でもなく、しかも+Aとしても-Aとしても定立されている第三のもの、Aそのものが現存している。かくして+Aか-Aであるべき筈の或物は+Aにもまた-Aにも關係せしめられる。

この事例は使用價值と價值との統一としての商品にもそのまゝ妥當する。即ち「商品は使用價值であるか又は價值であるかはしない。」と排中律は云う。けれども商品は自身使用價值でも價值でもないが、しかし同時に使用價值でもまた價值でもあるのである。このような對立物を統一せる商品に關して矛盾の論理を追求するのが次の課題となる。別稿において我々はこの課題を遂行するであらう。本稿においてははかばか矛盾の論理を先行しこれが基柢たるべき對立の論理、とくに差別と對立との識別について論じたにとどまる。(我々は矛盾論においては——前述の如く——「資本論」の具體的敘述に即してヘーゲルの抽象的論理學の検討を期するものである。)

(註一) 拙著「價值論争史」、第二章第三節。

(註二) 「小論理學」、グロツクナー版全集、第八卷、二七〇頁。松村二人氏譯、三一五頁。

(註三) 「大論理學」、第二卷、グロツクナー版全集、第四卷、五一六頁。鈴木權三郎氏譯、中卷、六三—四頁。以下特に卷

數を記さぬ。

(註四) 同、五一六—七頁。譯、六五頁。

(註五) 「小論理學」、二七二頁。譯、三一六頁。

(註六) 「大論理學」、五一八頁。譯、六七頁。

(註七) 「資本論」第一卷、アドラツキ版、九三—四頁。長谷部氏譯、二八五—七頁。○傍點のみ引用者。

(註八) 「大論理學」、五一九頁。譯、七〇頁。傍點引用者。

(註九) 武市健人氏著「ヘーゲル論理學の世界」、中卷、六六七頁。

(註一〇) 「大論理學」、譯、四一九頁。譯註二〇。

(註一一) 同、五二〇—二頁。譯、七二—三頁。○傍點のみ引用者。

(註一二) 「小論理學」、二七四—五頁。譯、三一九—二〇頁。傍點引用者。

(註一三) 「大論理學」、五二三頁。譯、七六頁。

(註一四) 同、五二四頁。譯、七七頁。武市氏、前掲、六七二頁。

(註一五) 「大論理學」、五二二頁。譯、七四頁。

(註一六) 同、譯、四一九頁。譯註二一。

(註一七) グーノト・フィッシャー著、坂上絢一郎氏譯「ヘーゲル哲學解説」、三五四頁。

(註一八) 「小論理學」、二七六頁。譯、三二二頁。

(註一九) 「大論理學」、五二七頁。譯、八二—三頁。

(註二〇) 同、五二八頁。譯、八四頁。

(註二一) 「小論理學」、二七九頁。譯、三三四頁。

(註二二) 同、二七九頁。譯、三二五頁。

(註二三) レーニン著、廣島・直井兩氏譯「哲學ノート」、一五二頁。ここで解説されているヘーゲルの文章も參照。「大論理學」、五四九頁。譯、一一八—九頁。

(註二四) 拙著「價值と價格」、一三〇頁。同じく「價值論争史」、第二章參照。

(註二五) 「資本論」、第二卷、アドラツキ版、三五二頁。長谷部氏譯、六六一頁。

(註二六) 同、第三卷、下、エンゲルス第六版、四一六—七頁。高島氏譯、四一四—五頁。

(註二七) ヘーゲル著「法律哲學」、第一九一節、ガンス版、二五一—二頁。田村實氏譯、下、六九頁。

(註二八) 同、第一九二節。

(註二九) 「資本論」第一卷、四六頁。譯、一八五頁。傍點引用者。

(註三〇) 「價值論争史」、第二章。

(註三一) 「價值と價格」、九二—三、一四八—五〇頁。

商品の二要因の對立について